

## 呑ん兵衛には辛い禁酒の地

エッセイスト・旅行ジャーナリスト 近藤 節夫

イスラム諸国の禁酒は普く知られているところだが、これはあくまで表向きの話で、実際一歩中へ入ってみるとかなり好い加減だということがよく分る。公的には「飲酒は絶対ダメ」で、外国人旅行者がホテルの自室でチビチビ嗜むために栓を抜いたウイスキーを持ち込んでも、税関で見つかったら最後、有無を言わず取上げられてしまう。隠した酒を見つけた時の係官の得意然として嬉しそうな顔が、ことさらシャクにさわる。彼らの中には没収品の一部をシンジケートへ横流して小遣い稼ぎをしている輩がいるからだ。

では、こっそり持ち込んだ酒を取りあげられてしまったら、呑ん兵衛の外国人旅行者は当座どうすればよいのか。探してみると裏道はいろいろあるようだが、とりあえず飲酒認可の一部のホテルバーか、町中なら「酒もどき」飲料水を飲んで我慢することになる。ところが、この「酒もどき」が奇妙キテツな味で、かつて流行った「ドクターペッパー」に似ていて、アルコール代用品とはいえ、とても酒代わりに飲める代物ではない。

一方で「千夜一夜物語」で知られる遊び人のアラブ王侯貴族たちには、禁酒なんか絶対出来るわけがないと勝手に決めつけ、土地の人間にしつこく質してみると、案の定「蛇の道はヘビ」で秘密の抽斗があった。やはりあるところにはあることを明かしてくれた。結局いづこも金と人脈次第なのである。彼らにはマル秘の購入ルートがあって、自宅には高級ブランディがうなっているらしい。とにかく「金、カネ、カネ」のアラブ社会では、金がなければ人生を享楽出来ない仕組みになっているのだ。

違法行為のゆえに大きな声では言えないが、短期滞在の外国人旅行者が部屋で気楽に飲むには、没収されて元々ぐらいの潔い覚悟を決め、税関の目を掠めて持ち込むよりほかに手取り早い術はないではないか。大体イラン航空やパキスタン航空なんか、機内でもアルコールのサービスが期待出来ないから、搭乗前に機内用と現地用を分けて持ち込み、税関の目を逃れる算段が、そもそも「呑ん兵衛がアラブ世界を旅行するための非常識の常識」と見られているくらいなのである。

先進国でもアメリカ・ユタ州のように、モルモン教の戒律のためにレストランでも四六時中アルコールのみならず、タバコや、刺激の強いコーヒーまでもままならないドライ・ステートもある。救いと云えば、高級ホテル(安ホテルでは絶対ダメ)内のレストランなら、何とかアルコールを嗜むことが出来る点だ。

丁度今から 20 年前の 11 月、州都ソレトレーク・シティに滞在した時、以前に宿泊した経験から呑ん兵衛のお得意さんに「このホテルならお酒は絶対飲めます」と太鼓判を押したことがあった。ところが、思いがけずホテルから、その日に限ってアルコールは提供出来ないと断られてしまった。何とその日はアメリカ合衆国大統領選挙投票日に当たっていたからである。ユタ州法によれば、大統領選挙投票日当日は、終日何びともアルコールを提供してはならないことになっている。

白熱した今年のアメ利カ大統領選挙ではあるが、ドライ・ステートの呑ん兵衛にとっては何とも憂鬱な季節なのである。